

中国改革以来の青海省チベット族村社会の変遷 —チュマル（曲馬爾）村とシュンボンシ（双朋西）村の事例から—

ガザンジェ

人間社会環境研究科 博士後期課程 1年

はじめに

内陸アジアのチベット高原の先住民であるチベット系民族は、7世紀のチベット高原統一以後チベット仏教に彩られた独特の文化を育ててきた。

しかし、19世紀に入り、ヨーロッパ帝国主義の影響により、チベット系民族の運命や文化は転機を迎えた。19世紀イギリス・インド帝国の軍事的圧力でブータンが独立し、ヒマラヤ南麓のシッキム、ラダク・ラホール・スピティ・キンノール、さらにはブータン東方のアルナチャルヒマラヤなど、ヒマラヤ・カラコルムのチベット仏教圏はイギリス・インド帝国が統治することになった。さらにシェルパ人地域はイギリス従属下のネパールが支配し、ブータン東方のヒマラヤ南麓（インドがいう NEFA）もイギリス・インド帝国の支配下に置かれた。チベット高原のチベット族は1950年代に中国人民解放軍がラサに進駐し、中華人民共和国の一部分に繰入れられた。

そこからチベット系の民族はそれぞれの部分が所属する国家の主要民族文化の影響を強く受けるようになった。言い換えれば、伝統的なチベット文化世界から統治国家の文化へと変わりつつある。

例えば、インド政府がラダク地域の経済開発の方向を観光地化に決めたことによって、ラダクの人々の生業と価値観は外来文化の影響を受け、インドあるいは欧米文化が浸透しつつある（ホッジ 2002『ラダク 懐かしい未来』）。ネパールのヒマラヤ山脈に大勢の登山者をはじめ観光客が訪れるようになるとともに、シェルパ人もチベット世界からネパール世界へ、或いは欧米化しつつある（鹿野 2001『シェルパ ヒマラヤ高地民族の二十世紀』）。

中国のチベット族も中華人民共和国の一部分になってから、中央政府の政治運動や経済政策によって、チベット族の文化や社会、経済など各側面から変容し始めた。

1979年以來、中国政府の改革開放政策は中国の経済発展の転換点になり、中国の経済は急速な発展を遂げた。とくに、2000年から中国政府は西部大開発政策を実施し、これがチベット人地域の経済的発展をもたらした。

チベット地域の経済発展はチベットの伝統的な社会や宗教、文化、習慣などに大きな影響を与え、村社会の家族構成、人口、組織、人間関係、日常生活などにも変化を引き起こした。

今回現地調査では青海省のチベット族の村社会が1950年の解放以来60年間でどのように変化したか、特に1979年中国改革開放後現在までの約30年間の急速な市場経済の浸透が青海省チベット族の村社会の組織、人口、家族構成、生業、教育などにどのような変化を与えたかに注目して聞き取り調査を行った。

1. 調査日程と訪問先

筆者は2012年7月16日から10月27日まで中国青海省黄南チベット族自治州同仁県双朋西郷双朋西村と曲馬爾村で調査を行った。

調査地の曲馬爾村と双朋西村は行政的に同仁県双朋西郷に所属する。

同仁県は青海省の東南を占める黄南チベット族自治州の東北部に位置し、東は甘肅省のチベット地域夏河県と接する。地理的位置は、東経101.38度から102.27度まで、北緯35.1度から35.47度までである。農業を主とし、牧畜業も行う地域である。

双朋西郷は同仁県の東南部にあり、県政府がある隆務鎮とは33キロ離れている。双朋西郷の最高海拔は3945メートル、最低海拔は2660メートルである。年間平均気温は3.3度、年間降水量は461.7ミリメートルである。雨季は7月、8月、9月である。

2011年の人口調査によると、双朋西郷で651戸あり、人口は3663人、その全部がチベット人である。双朋

西郷の面積は 250.97 平方キロメートルであり、そのうち耕地は 10045 ムー（1 ムーは 6.667 アール）で総面積の 2.6% を占める。畑は双朋西郷の西北の海拔 2660 メートルから 3000 メートル間の山地に分布し、主な農産物は、春小麦、裸麦、アブラナ、豌豆である。草地は 36.6 万ムーで総面積の 89% を占め、双朋西郷の東南部の海拔 3000 メートル以上の高冷地に広がっている。主な家畜の種類は、ヤク、牛、羊、ヤギ、馬、ロバ、ラバなどである。

曲馬爾村は 45 戸からなる小さい村であり、人口は 310 人である（2012 年）。村の海拔は 3200 メートルであり、郷政府がある双朋西村とは 38 キロ離れ、さらに県政府と州政府がある隆務鎮とは 50 キロ離れた山の上の村である

双朋西村は 254 戸からなり、人口は 1395 人（2012 年）の大きな村である。村の海拔は 2660 メートルであり、これは双朋西郷で最も低い。県政府がある隆務鎮とは 33 キロも離れている。

2. 調査内容

2.1 農牧畜の変遷

農業と牧畜業はチベット族の伝統的な生業であり、経済的な面でも重要である。そのため、現在青海省チベット族の村社会では農牧畜の発展は経済発展とは緊密な関連を持っている。

しかし、1950 年代から中国は人民公社・合作社など農業の集団化政策を実施し、その後請負（承包）制に変えたため、青海省の農牧畜の発展に大きな影響を与えた。

今回の調査地である青海省同仁県は 1950 年に中国共産党の支配が及びその年の 6 月に同仁県第一期各族各界人民代表会議を召集し、そこでは第一期同仁県人民政府委員会や県長、副県長などが中共の指示によって選ばれた。1952 年 2 月に同仁チベット族自治州が成立した。

1955 年同仁県も中央の農牧畜の政策に従って、農牧畜の互助組を実行した。互助組というのは、村の 3、4 戸が一つのグループになって一緒に労働する仕組であった。資料によれば、1955 年黄南チベット族自治州で互助組政策を行って、その年の全州の食糧総産量は 1954 年の 744.15 万キログラムから 1547.15 万キログラム、107.91% の増加となった。（『黄南チベット族自治州誌』 pp106）



調査村が属する双朋西郷政府

たてまえでは互助組は当時、村の労働力や農具の不足を解決するためであった。一方で村人の社会主義の集団意識を育成し労働意識を高めるとともに、以後の合作社や人民公社を組織する準備のためであった。

1958 年青海省では「民主改革」政策を行い、村人は地主、牧畜主、富農、中農、貧農など階級に区分された。地主と牧畜主の畑や家畜、財産、部屋など私有財産を人民公社の共有財産にした（場合によっては国有農場にした）。富農や中農、貧農などの畑や家畜は一定の補償を行ないつつ人民公社の共有財産とした。また、地主や牧畜主は住居すら取り上げられ共有とされたが、それ以外の階級の家は自家所有が許された。

土地財産は人民公社のものとされ、村人が共同で労働して収穫した物は人民公社に所属し、村人は共同食堂で一緒に食事をすることになった。

双朋西村の村人によると、双朋西村は 1958 年当時 90 戸ほどしかなかったが、13 軒が一つの小組織（生産隊）とされ、村全体は七つの生産隊に分けられた。生産隊は村の畑や家畜、さらには炊事道具まで人民公社に提出し、各生産隊に所属する各家族は隊長の命令に従って共同で労働した。村人は毎日村の食堂で一緒に食事した。その時、双朋西村では食堂を子供用の食堂と老人用の食堂、一人前の農牧民すなわち労働者用の食堂という三つに分けた。理由は一人前の農牧民は労働に従うが、老人子供は労働しないので食糧を労働の状況にあわせて分配するためであった。このため一家団欒の時間はなくなった。

1958 年から 1963 年まで、人民公社では、村人は共同で労働し、共同食堂で食事した。しかし、人民が積極的に労働しなくなったため、1963 年から労働点数制度を導入した。労働点数制とは、個人が労働に参加した労働日によって、その年末に人民公社から食糧を

個人に分配することである。そうすることによって、多く働いた者が多くの報酬を得るようにした。

1980年同仁県では農牧畜は人民公社の大集団から小集団に変化し始めた。双朋西村や曲馬爾村では、4、5戸が一つのグループすなわち合作社になって合作社単位で労働し、収穫したものは一定量を上納すれば残りは合作社所有となり労働日数に応じて家族に分配された。

1978年末鄧小平が中共中央の指導者になると、チベット高原にも変化が生まれた。1982年には人民公社・合作社をなくして畑や家畜を各家庭に請負わせる家族請負（承包）制度を実行した。村の畑や家畜は各家族の人数によって分配された。これは農村の牧畜業の発展の転換点になった。

2006年から農牧畜税を免除し、その上農業の場合には1ムー（6.7アール）に50元の補償を与える政策も登場した。

1950年以前、双朋西村90戸のうち農牧兼業は30戸ほど、農業だけの家庭は60戸ほどである。

双朋西村のA（農牧民 74歳）は、民主改革前まで10人家族であった。彼の祖母と両親、兄、4人の妹と弟である。彼の家には羊300匹、牛50頭があり、畑は20ムーほどあるので、家族の日常生活は保障できた。しかし、1958年の民主改革では、彼の家は富農階級に決定し、畑や家畜、部屋など所有物全部が人民公社の公共財産になった。彼らは1958年から1963年まで人民公社の食堂で村人と一緒に食事し、住居が取上げられたので、家族は村のマニカン（村の共用儀礼場）で住むことになった。

人民公社になった最初の頃は、村の食堂からよい食料が提供されたが、1959年から1962年までの間に、自然災難や人災で村全体が飢餓状態となり、餓死者が数十人も出た。そのため1963年から村では労働点数の制度を実施し、村の食堂をなくして個人の労働点数によって人民公社から食糧を分配することになった。当時、彼の家族10人のうち、労働力は4人しかいなかったため、労働点数で分配した食糧で家族全員の日常生活を保障できなかった。そのため毎年、人民公社からしばしば食糧を借りる状態であった。

1982年鄧小平の農政によって請負制が実施されたとき、彼の家にはヤク18頭、羊60匹、畑は14ムー（山地10ムー、灌水地4ムー）が分配された。これ以後生活は豊かになった。

2011年まで彼の家には家畜が羊400匹とヤク80頭

表1 A氏家族の農牧畜変化

1958年	ヤク50頭 羊300匹	畑20ムー	人民公社の公有財産になった。	当時、重要な収入源は農牧畜であった。
1982年	ヤク18頭 羊60匹	畑14ムー（灌水地4ムー、山地10ムー）	人民公社から配分した。	当時、重要な収入源は農牧畜であった。
2011年	ヤク80頭 羊400頭 （同年10月全部販売した）	実際8ムーしか播種しなかった。（灌水地4ムー小麦、山地4ムー雑草）		重要な収入源は牧畜業と出稼ぎである。

ほどがいたが、労働力不足のため羊は全部売却したため、現在、ヤクのみ80頭ほどしかない。最近、出稼ぎ収入が増加し、灌水地はもちろん播種するが、山地の畑ではあまり収穫できないため、4ムー程度しか播種していない。4ムーは家畜飼料用の牧草を播種している。

最近、冬虫夏草や建築、道路建設の出稼ぎも増加し、人件費も高まったため、家族の重要な収入は出稼ぎと牧畜となった。農業の収穫は家族の年間食糧を自給するだけである。

曲馬爾村や双朋西村の農牧畜において、1958年の人民公社まで家畜や畑は各家庭の所有物であった。当時村では、貧富の格差もあったが、村全員は所有する家畜や畑、また地主や牧畜主のもとで雇用労働に従事して生活することができた。

1958年民主改革で村人の所有物は全部人民公社の共有財産になり、村人全員は経済的に平等になったが、1959年から1963年まで天災や人災で多くの村人が餓死した。1963年から1980年まで村人の労働積極性と生産量を高めるため、労働点数の制度を実行した。そのため人民公社の生産量もある程度高まって村人の最低の生活を保障できた。

1982年家畜や畑を各家庭に請負わせる制度を行い、村人も自己の努力で衣食が足りるように問題を根本的に解決した。

1990年代から建築・道路工事など出稼ぎが増加したため、村人は農牧畜以外の経済収入も増えた。特に、2000年の西部大開発政策が登場するに及んで出稼ぎが増加するとともに、冬虫夏草（蛾の幼虫にキノコの生えたもの、和名フコムシナツクサタケ）の値段も上がったためこれを掘りに行く人が激増し、村人の重要な収入源は農牧畜から出稼ぎに変化している。



牧畜地の羊

それは、調査村の畑はほとんど山地であり、村人の農作業も伝統的な技術に限られているので、農業の収穫はあまりよくないからである。調査村で生産したハダカムギやアブラナは市場に出してもよい値段で売れない。

内地漢人地域でも1990年代以後、農業をやめ出稼ぎに頼る農民が増加している。中国の農産物（主として野菜・果物以外の米・小麦など穀物）の値段が低いいため農業収入はあまりにも低い。チベット人地域も例外ではなく、調査村でも農業をやめて収入は出稼ぎだけに頼っている家庭が増えている。

牧畜は今も村人の重要な収入である。双朋西村の村人の中では貧富の格差をあらわすのは家畜数である。主として牧畜を行う家族は経済的に村の上層であり、家畜がない家庭であれば中層と下層であるといえる。なぜなら家畜の値段が毎年上がることによって牧畜収入も増加しているからだ。

例えば、2011年2月現地で調査を行った時、市場の羊肉1キロの値段は34元であり、当時、羊一匹の値段が平均で1000元であった。2012年8月羊肉の1キロの値段は54元であり、羊の値段も一匹平均で1700元まで上がっている。それで、調査地の牧畜は現在も伝統的な放牧に限られているが、家畜の価値が経済的に毎年上がっている。それゆえ調査村では現在も牧畜が重要な収入源になっている。

以上の農牧畜政策の変遷を示せば以下のようになる。

- 1950年 解放軍同仁県に進駐。
- 1952年 同仁チベット族自治県に決定した。
- 1955年 互助組を実施した。
- 1958年 民主改革で階級区分をおこない人民公社・

合作社制を実施した。

- 1963年 労働点数制を実施した。
- 1966年 文化大革命を行った（1976年まで）。
- 1979年 鄧小平により「改革開放」政策に移る。
- 1982年 人民公社・合作社を廃止し、畑や家畜の家庭請負制を実施した。
- 2000年 西部大開発政策を行った。
- 2006年 農牧畜税免除、農業の場合は1ムーにつき50元を補助するようになった。

2.2 調査村の教育の変遷

1950年代まで調査村に学校は無かった。学校ができたのは中共が支配するようになってからのことである。それまで村の知識人は僧侶や在家の世俗僧であった。彼らは寺院や家庭で宗教儀礼や修行するため、チベット仏教を主としてチベット文化を習ったわけである。そこで、調査村の教育を紹介する前に、チベットの伝統的な教育機構である寺院の教育制度を概観したい。

2.2.1 チベットの伝統的な教育機構

伝統的なチベット文化の中心はチベット仏教であるため、教育も宗教と緊密に関係している。

1950年代前はチベット社会では教育機構と言えば、寺院である。寺院では伝統的に本格的な教育システムが存在した。チベットの最高学府であるラサのガンデン寺やデボン寺、セラ寺、シガツェのタシルンポ寺、西寧のクンブム寺、甘肅南部のラブラン寺などの寺院では正統的な学院やゲルシェの学位（博士号）も設置している。

ラブラン寺では聞思学院（仏教の理論や哲学、弁証法を勉強する）や密教学院、天文学院、医学院など四



調査村のカッシュツエ寺



授業を終わって外で遊ぶ小僧侶達



カッシツエ寺全クラスの年間授業目標掲示板

つの学院を設立し、それぞれ学制やクラスも設置している。

例えば、聞思学院では仏教の五部大論や弁証法（因明すなわち論理学）を主として勉強している。学制は20年間である。そのうち、弁証法は3年間であり、五部大論の俱舍論は3年間、中観論2年、釈量論3年、戒律3年、般若6年である。五部大論の学習を修了した僧侶は、寺院にゲルシェの学位を申請することができる。申請者は寺院の学者らと弁証法で議論、五部大論を暗唱するなど厳格な試験を受けた後、合格すればゲルシェの学位を得ることができる。

チベットの寺院では基本的に学院やクラスを設置し、仏教を中心としてチベットの歴史、文学などを教えている。それで調査村の寺院でも僧侶らが仏教やチベット文化を勉強している。寺院による教育が、仏教とチベット文化の継承や発展に莫大な貢献をしたことは無視できない。一方で、寺院の教育内容は伝統的・保守的で、しかも教育が寺院に限られたので、チベットの村社会の近代化や普通教育の発展には障害もあった。

2.2.2 調査村の教育の変遷と現状

1957年前まで調査村には学校がなかった。1957年に当時の県政府が曲馬爾村と双朋西村に学校を建て、最初は村の世俗僧のひとりが学校の先生となった。当時、授業の科目はチベット語と算数であった。教科書もなくチベット語の授業の内容は文字や観音菩薩贊辞などチベット仏教の基本的な経文の暗唱であった。

1963年、県政府は正式な先生を派遣した。授業の科目もチベット語から漢語、算数3科目に増えた。教科書も政府が分配し、教科書の内容はほとんど共産党の革命物語であった。1966年から文化大革命が起きたため、教科書の内容も毛沢東語録に変わり、チベット語の授業は停止された。10年間の文化大革命では、学生達は学校で勉強するよりも日常政治運動（紅衛兵）に参加し「破旧立新」といって寺院その他の伝統的なものや文化を破壊し暴れまわった。

1986年になると、九年義務教育が実施されるようになった。九年義務教育とは適齢児童や少年は必ず9年間の国民義務教育を受けるという制度である。調査村の学校も政府の支援で施設などを改良し、村の適齢児童は全員学校に通うことになった。2002年双朋西村に位置する双朋西郷では中学校を建て、村の子供たちは学校に通いやすくなった。それゆえ、調査村の子供の入学率も上がった。

とくに、2006年から十一年義務教育の制度を行い、中学校を卒業するまで授業料などを免除した上、学生に対して毎月生活の補助もした。そのため、調査村の中学生までの入学率は100%に達した。

筆者が調査村で村人の各年齢層に対して、チベット語と中国語の識字率をアンケートで調査をした。その結果は村人の男女を問わずチベット語文の識字率は99%であり、漢語（中国語）の識字率は35%であった。それは世代によって教育制度が違ったのが原因であった。

年代別にいうと、70歳代の村人は当時学校で漢語を学習しなかった。60歳代や50歳代の村人は当時学校で漢語を教わったが、使用することがあまりなかったため、忘れてしまったようである。しかし、40代や30代、20代、10代の若い者は両言語の識字率がとても高い。それは改革開放や教育制度の変化、出稼ぎの増加などが原因であると考えられる。

2012年まで双朋西村の村人1395人のうち、6人は大学院修士課程を、140人は大学を、70人は短期大学を卒業した。曲馬爾村の村人310人のうち、2人は修



勉強している調査村の中学生達

士課程を卒業し、15人は大学を卒業した。

村社会の教育も1950年前は寺院や政俗僧など宗教団体に限られていたが、時代の変化とともに、授業の科目も最初のチベット語と算数から中国語、歴史、自然などに増えた。授業内容も仏教の経文暗記から文化大革命時代の毛沢東語録、改革開放以来は普通教育が発展し、自然科学・社会科学はもとより外国の文学や歴史など世界を知るための内容に変わった。

現在、調査村の学校ではチベット語や中国語以外に英語の授業も設置しているため、英語も話せる学生も増加している。

2.3 村社会の組織、家、財産の継承などの変遷

2.3.1 村の組織の変遷

現在、チベットの村社会には、氏族など伝統的な組織や村長、党支部書記など近代的な組織がある。しかし、1958年以前は村長や党支部書記などなく、伝統的な長老会で村全体のことを決めていた。1958年、人民公社・合作社が実施されるにともなって村長（当時生産大隊の隊長と呼ぶ）や共産党支部書記などが設置されることになった。

聞き取りによると、1950年代以前は村の組織は長老会と年間儀礼の主宰者から成り立っていた。長老会は7人の長老からなり、村の紛争や事件などを解決する組織である。村社会では紛争や殺人事件、離婚などが起きた場合は、長老会が伝統的な習慣法で処罰した。長老会の会員は年齢各層を超えて、村人が尊敬する人や紛争を解決する時公平な人、知恵に富んだ人を長老に選ぶ。毎年村人は新しい長老会を選ぶが、長老の任期はなく何回選ばれてもかまわない。

主宰者とは村の年間儀礼や宗教儀礼、とくに毎年寺

院への布施を村がおこなうとき主宰する人である。毎年各氏族から1軒が順番に選ばれ主催者になる。例えば、双朋西村は6氏族からなっているため、毎年の主宰者は6軒である。

1958年人民公社・合作社の政策が実施され、村は生産大隊を単位として行政組織を決め、生産大隊長（1982年から村長と呼ぶ）や党支部書記を設置した。

生産大隊はいくつかの生産小隊から成り立っている。例えば、双朋西村は当時、七つの生産小隊（人民公社の基礎となった農村の生産組織）に分けられ、各生産隊に小隊長が設置されていた。政府が政治政策など各大隊長や党支部書記に通知し、大隊長が各小隊長に伝える。各隊長は各戸に伝達して生産隊の生産や労働を主催、監督する。

1963年に人民公社では労働点数の制度を実施し、日常の各戸の労働点数を記録することや収穫後労働点数で食糧などを分配するため、各小生産隊や大生産隊に秘書を付けた。当時、各小生産隊の秘書は、日常生産隊が労働に参加した点数を記録した。大生産隊の秘書は、秋の収穫後や年末に各戸の労働点数によって小麦など食糧や金を分配した。

1982年畑や家畜の各戸請負制を実施する時、生産隊の秘書の仕事はなくなり、大生産隊の隊長も村長に変わった。

現在、調査村の行政組織は党支部書記や村長、各生産隊長である。一方では宗教的な年間儀礼を主催する伝統的な組織が現在も残っており、毎年の宗教儀礼を主催している。長老会の制度は人民公社の政策で無くなったが、長老の影響はある程度残っている。例えば、現在も村では草地紛争や窃盗・暴力事件、離婚などが起きた場合、村の年長者達が習慣法で解決するため努力している。

しかし、成功率はあまり高くない。それは村人の現代法の知識が増えたこと、チベットの年長者を尊敬する伝統的な意識が弱くなったことなどが原因である。それゆえ、長老の影響力は衰滅の傾向にある。

2.3.2 家屋の変遷

チベット人は昔から農業と牧畜業を主な生業としてきた。家屋は生業によって違う。例えば牧畜業の場合は、季節によって家畜とともに移動しているため、移設可能な組立式のテントになっていることが多い。農業の場合は定住家屋になる。

調査村は半農半牧であるため、村人は集落の定住家

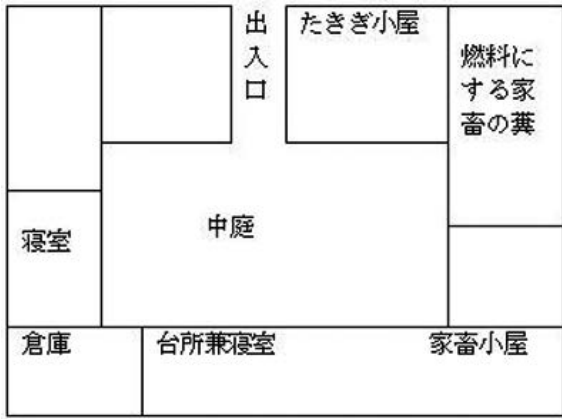


図1 1950年代の調査村の家屋の図



村の家屋



図2 1989年建てた調査村の家屋の図

屋とテント（現在簡単な家型テントになっている）を持っている。しかし、村人のほとんどは集落の固定した家屋で生活をしている。草原では各家族一人しか住んでいないので、本論では集落の定住家屋の変遷を紹介したい。

家屋の形は長方形であり、基本的に長さは18m、幅は16mである。四面の外壁は高さ3mの土壁である。室内は木造であり、平屋根（陸屋根）である。寝室、客間、家畜小屋、たきぎ小屋などの配置は年代や経済

発展の原因で変遷している。

1950年代以前の調査村の家屋の特徴は、家族が家畜と同じ部屋で住んでいることである。それは当時、社会があまり安定せず、盗難などの事件がよく起きたからである。家畜は農作業、搾乳などに不可欠なもので村人にとって重要な財産なので、それを保護するために家畜小屋は寝室に接していた。

改革開放以来社会も安定し、家畜の盗難などは少なくなり、家畜小屋は寝室から切り離された。それは図2に見る通りである。

2000年西部大開発政策によって、建築や道路の修築、冬虫夏草などの出稼ぎが増加したため、村人のうち農業をやめて出稼ぎだけに頼る家庭も増えた。またハンドトラクターで耕作することになって家畜は村人にとって重要ではなくなった。

近年の新築家屋では、伝統的な家畜小屋を配置せず、その代わりに農機具や自家用車の車庫などを建てている。

2.3.3 財産相続と扶養の変遷

チベットの伝統的な財産相続は地域によって違う。長子相続か末子相続かも地域によって異なる。

調査村では、基本的に末子が生家を継承することになっている。嫁入婚であれ婿入婚であれ平等であるため、息子が3人以上いる家族では2人の息子を残してそれ以外の息子は婿養子や僧侶になることが多い。時には息子がいても娘に婿を取ることもある。以下では事例を通して調査村の財産相続や扶養の変遷を見たい。

事例1

双朋西村のCは今年70歳であり、彼は30年ほど前生家から分離して独自の家を建てた。彼の兄弟は兄と姉4人であった。当時、一人の姉は結婚する前、未婚の母として一人の息子（すなわち甥）を生家に残した。兄は結婚した後、すぐ別な家を建てて分家した。彼と甥が生家を継承することに関して、彼の両親は機会を平等にするため、くじ引きをした。その結果彼が生家から出るようになった。この地方では誰かが生家から出て新しい部屋を建てるとき、その費用は両親や兄弟全員の負担である。それで彼の場合も同様、男兄弟全体が負担した。家の家畜や畑、財産なども兄と甥、彼の三人で平等に分けた。

2002年彼は息子達に家産を分割した。彼には息子

4人と娘3人があったが、二男と三男は婿養子になった。娘達は嫁に行ったので、家産は長男と末子に分割することになった。彼は平等に財産を分割するため、ヤク50頭や羊150匹の家畜を五つに分け、ヤク10頭と羊30匹にした。それらを①長男の分、②末子の分、③両親を扶養する分、④長男に新しい家屋を建てる費用分、⑤末子の結婚費用分としたことにより、彼の長男は新しい家屋を建てて生家から分離することになった。すなわち、結果的に末子は生家を継承し両親の面倒を見ているので、②や③、⑤を得、長男は①と④を得た。

事例2

双朋西村のD(63歳)には息子が5人と娘が2人いた。しかし、息子のうち次男が婿養子、三男は僧侶になり、二人の娘は嫁に行った。それ故、彼は2004年に家産を家に残る3人の息子達に分割した。当時、彼がヤク70頭と羊300匹を六つに分割した。

六つを①長男の分、②四男の分、③末子の分、④両親扶養の分、⑤三男の僧侶を扶養する分(チベットの僧侶の生活用品は基本的に家族から提供する)、⑥末子に新しい家屋を建てる費用分とした。しかし、彼が上述のうち両親を扶養する分と三男の僧侶を扶養する分は3人の子供に平等に分割した。それは3人共同で両親と兄弟の僧侶を扶養するということであった。

事例3

曲馬爾村のE(60歳)は、息子が2人と娘が3人であった。そのうち、彼の末子は公務員であり、娘達は嫁に行った。2011年に彼が家産を分割する時、末子には安定した収入があり、仕事の都合で年間に2、3回しか村に帰らない。末子が州と県政府がある隆務鎮で長年生活しているため、生家や家畜など家産全部長男が継承することに決めた。そのかわり末子が町でアパートを購入するとき、家族は少し援助することにした。

末子相続については、日本の人類学者中根千枝が以下のように述べている。

「長男が結婚する頃は、父親はまだ壮健であるが、末子が結婚するころになると年老いてくる。したがって、家族の労働力配分からも至当な方法と言える(中根1987『社会人類学』P96)」

調査村では生家を基本的に末子が継承している。しかし、家庭の事情によって異なる場合もある。特に、

改革開放後、村人は農牧畜の生産以外に子供達の教育も重視するため長男は農業や牧畜業の労働者になり、末子は学校へ通うことがおおい。末子達は公務員や教師など安定した収入があり、村と離れた町で長年生活することが多くなる。この状況によって長男が生家や家畜、畑など家産相続することもまた増加したのである。

チベットの伝統的な財産継承の条件は子供達に公平に均分することである。改革開放後経済の発展や子供の教育が重視されたことが原因で、近年労働者の長男が生家や家産全部を継承することになっている。それは長男が農業や牧畜業を行い家族にとって莫大な貢献があるからである。また末子に安定した収入があることも理由である。それ故、村の財産継承方法は時代や経済発展によって変遷しているが、その条件である公平平等の原則は現在も変わっていないといえる。

3. まとめと今後の展望

調査では中国青海省チベット族の村社会の変遷を聞き取りで概観することができた。

本調査を通して1950年解放以来の中国青海省チベット族の村社会の変遷は主に二つの時期に分かれることが分かった。1つは、1950年から1979年改革開放までのチベット村社会の行政組織の変遷、もう1つは、改革開放以来の経済発展によって村人の家屋、財産相続や扶養など伝統的な習慣の変遷である。

1979年改革開放までの組織的な変遷は、チベット族の村社会にとって受動的なものであった。それは中国のチベット族は1950年代解放以来、中国の政治運動や政策に従ってきたからである。典型的には合作社、人民公社、文化大革命などである。これによって伝統的な村社会の長老会、寺院など伝統的な社会システムは破壊された。その代わりに中央政府が党支部書記や村長などを設置し、政治や経済面で中共がつくった政府が直接村を管理することになった。

改革開放以来の村社会の家屋や財産相続と扶養など伝統的な習慣の変容は能動的であると言える。1979年改革開放後村社会では畑や家畜を各家庭に請負わせる家族請負(承包)制度を実行し、経済的な発展が村の家族構成、人口、教育などに影響を与えて変容させた。言い換えれば、村人も経済的な発展や社会全体の変容に応じて、生活の空間である家屋や財産相続と扶養などの伝統的な習慣を変遷させたといえる。

1950年代以来村では小学校教育を受けられるようになり、特に、改革開放後は義務教育制度が実行された。現在、村社会では中学校や高校、さらに大学の教育を受けた村人もどんどん増えている。村人のうち、年長者がチベット語しかわからないことに対して、若者のなかにはチベット語・中国語のバイリンガルであり、さらに英語ができる人も生まれた。それで、チベットの村社会ではチベット文化の消滅傾向を惜しみ、知識人を中心として伝統的なチベット文化を継承し、外来文化も吸収しながら中国の経済や社会の発展に応じた独自の近代社会へ進むための努力も生まれている。

解放前の封鎖的な独自の社会は、1950年以来、中央政府の政治や文化の影響から免れることはできなかった。漢文化はチベット文化に強烈な影響を与え続けている。特に、改革開放以来、チベット族の村社会の経済もある程度発展し、村人も学校の教育を重視するようになった。若者たちが学校で教科書やマスメディアなどを通して外国の歴史や文化と接触し、西洋の歌やダンス、ファッションなどをまねする若者は町や学校でよく見るようになった。外国語の旅行ガイドをしている若者も増えている。さらに外国へ留学に行く人もふえている。言い換えれば、今日のグローバリゼーションの時代に、外国の文化もある程度間接的にチベットの文化に影響を与えている。

今後、1950年以来の青海省チベット族の村社会の組織、農牧業の変遷、特に改革開放以来の経済の発展によってチベット村社会の人口、家族構成、生業などがどのように変遷したか、詳細に調査する。1950年以来から現在までの中国青海省チベット族の村社会の民族誌を記録したいと思う。

参考文献

「黄南チベット自治州概況」編委員会

2008 『黄南チベット自治州概況』民族出版社

ペツマウンチェ

2007年 『双朋西村の歴史』甘肅民族出版社

ヘレナ・ナーバグ・ホッジ

2002 『ラダック 懐かしい未来』「懐かしい未来」翻訳委員会 訳 山と溪谷社

鹿野勝彦

2001 『シェルパ ヒマラヤ高地民族の二十世紀』茗溪社

中根千枝

1970 『家族の構造』社会人類学的分析 東京大学出版社